

中国海軍ニュース：中国の核潜水艦生産を予測する

漢和防務評論 20171209(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国は 094 に次いで、新型弾道ミサイル潜水艦 (096) を開発しようとしています。
この種の潜水艦は図体が巨大で騒音も大きく、発見されやすい特徴がありますが、弾道ミサイル発射プラットフォームとして隠密行動ができる利点があります。当然空と海からの掩護を必要とするため、ロシア海軍の SSBN の演習では領海内でのみ行動したということです。
今日の KDR の記事によると、中国の SSBN が米国本土を狙うためには台湾攻略が不可欠である、と述べています。



Google 衛星写真 海南島亜龍湾の核潜水艦基地 (20170901 画像取得)

KDR 香港特電：

種々の形跡を総合すると、中国は新時代の 096 型弾道ミサイル潜水艦 (SSBN) を近々生産する可能性が極めて高い。KDR は、1 艘しかない 032 型ミサイル実験艦を 2.4M の高さの塀の囲いの中に確認した。これは次世代型潜水艦発射弾道ミサイルの実験である可能性が極めて高い。結局これは DF-41 型の改良型なのか？又は DF-31AG/A の改良型なのか？詳細な研究が必要である。

また本年 3 月の衛星写真によると亜龍湾海軍基地に、4 艘目の 094 型 SSBN が停泊しているのを確認した。4 艘の 094 が同時に同じ軍港に停泊しているのは

初めての発見であった。この前の衛星写真では 3 艘の 094 だけが確認されていた。KDR は 4 艘目の 094 が 2016 年には建造中であったことは知っている。2 月の衛星写真を見ると、葫蘆島造船所に大型の核潜水艦建造工場が出来上がっているのが確認された。相当大きな工場であるが、生産が始まった形跡は見られない。従来の 094 を建造した船台にも新たな船の建造の動きは見られない。これらの形跡を総合判断すると、094 の建造は一段落した可能性がある。次は、次世代の改良型 096 型 SSBN が建造されるであろう。当然これと同時に 095 型核動力攻撃型潜水艦 (SSN) の建造も同時進行する可能性がある。

KDR は、2014 年から拡張が始まった葫蘆島造船所の工場室内の寸法を推測したことがある。ここで 096 の寸法と比較してみる。控えめに見積っても：新たに建設された工場は、通常の生産体制下であっても、少なくとも同時に 4 艘の核潜水艦が建造できる大きさだった。094 と 095 の同時生産ができた可能性がある。いわば、094 は 3 年に 1 艘の生産周期であったことから、もし 2018 年に 096 の初期生産が開始されたならば、9 年後の 2027 年には 096 の建造数が 6 艘前後に達する可能性がある。095 もまた同じ速度で同時に生産される可能性がある。

また別の可能性も考えられる：中国は、米国、ソ連、ロシアに遅れまいと、巡航ミサイル核潜水艦の建造を開始する。核潜水艦に DF-10 型巡航ミサイルの潜水艦発射型、あるいは YJ-18 の潜水艦発射型を搭載する。

巡航ミサイル核潜水艦は、台湾東岸、日本本土、グアム、将来のハワイにとって致命的な脅威となる。

最近のある時期以降、官方のテレビ局は、中国技術者が設計した核潜水艦用ポンプジェット式推進器を公表した。2017 年 5 月、中国中央テレビはこの推進器の写真を放映した。これは、最近建造された核潜水艦のスクリューの外観が米国の最新型核潜水艦の外観とそっくりであることを意味した。しかしこれは試作段階であり、実際に生産されるものとは一定の距離があると思われる。

最も重要な情報は、032 実験型潜水艦の外観の変化である。これは、今年ネット上に公開された写真で、船体後部が約 2.4m 隆起していた。SLBM 発射筒のために改装したものであろう。この前に 032 は、2 個の発射筒を取り付けた。最も可能性があるのは、テストの後期に改良された JL-2A 型 SLBM である。JL-2A は DF-31A の潜水艦発射型のはずである。

032 の船体の改修は、JL-2A のテストが終了し、生産が開始され、配備段階にあることを意味する。この結論は極めて重要だ。

米露の SLBM は、通常陸上発射の ICBM 技術を移植したものであり、中国も同様である。例えば、JL-2 は DF-31 技術から派生したものであるが、實際上 2 者の違いは相当大きい。一般に、艦上発射 SLBM は体積を縮小しなければならない。そして射程も 20%縮小する。DF-31 の基本型の射程を 8000KM と計算すると、基本型 JL-2 の射程は 6000KM となる。DF-31A の射程を 10000KM とすると、JL-2A の射程が 8000KM となることは論理にかなっている。

DF-31A と DF-31AG との関係について、今回軍事博物館に並列して展示された

模型から見ると、長さ、直径とも変化がない。AGは主として発射環境を改善したもので、自走車に換装し、電子測定、大気環境観測の手順を簡略化し、地形に依存せず発射が可能になった。SLBMはこれらの改良が基本的に不要である。したがってKDRは多くの人々の基本的に一致した意見に同意する：032の改良は、主として、JL-3新型SLBMのテストに用いられ、後者の技術はDF-41型ICBMのものである、と。DF-41は2015年以降何度も出現し、現在小規模バッチ生産に入ったとの情報は正しいと思う。このように見ると、これを基礎にして海上発射型DF-41を設計したことは、当然論理にかなっている。しかも中国海軍の核戦力としては画期的な出来事である。

かなり大型のDF-41をSLBMに改修することは、大きな作業である。電子システム全体、エンジン、複合材料、或いは燃料タンクの容積などを大きく改修しなければならない。DF-41は様々な弾頭を搭載し、射程は、12000乃至13000KMに達する。JL-3の射程を10000KMにすることは可能だ。しかしこれは中国海軍の要求ではない。

地縁関係に基づいて、海南島経由太平洋軌道でハワイを狙った場合、直線距離は10000KMである。北極軌道の場合アラスカまで8000KMである。米国本土北部の大都市までは11000KMを超える。1000KMの射程の違いは、脅威のレベルが全く異なる。

したがって現在配備された094/JL-2の脅威は、アラスカ、グアムまでである。ハワイを攻撃しようとする場合は、2000KM以上の海上機動が必要である。南シナ海からバシー海峽まで十分な水深があったとしても、SSBNにはこのような長距離機動は無理である。ソ連、ロシアの代々SSBNは、海上演習において領海内でしか行動しなかった。

したがって、JL-3開発の重点は、射程11000KMを突破できるかどうかにかかっている。もし突破したならば、ニューヨーク、シアトル等、一連の米国大都市がJL-3の射程に入る。そうでなければ、射程が10000KMでも11000KMでもあまり意味はない。

大型化したJL-3の開発開始にともなって、予測できることは、096のトン数である。外形が大型化する可能性がある。ある説によると、094の水上排水量は11000トンに達する、と。これは一部の外国技術者の推計に過ぎない。中国には未確認である。

もし096が12発のJL-3を搭載するのであれば、標準排水量は15000トンを超える。ロシアのBOREY級最新型SSBNの水上排水量は15000トンであり、水中排水量は24000トンである。長さは170M、16発のBULAVA RSM-56型SLBMを搭載する。MIRV弾頭数は6乃至10発である。

北朝鮮のICBMを誤って低く評価した教訓から、KDRは中国のICBM或いはSLBMについても評価が正しいかどうか分析している。特にMIRV弾頭数についてである。ウクライナは、MIRV弾頭製造技術と経験を保有しており、ウクライナからのミサイル技術拡散は公然の秘密であるが、どの程度拡散したかが

不明である。もしウクライナ技術者の技術支援が受けられたのであれば、中国の MIRV 技術は、通常的方式で分析することはできない。弾頭を 1 個ずつ増やしていく必要がないからだ。

このように見ると、DF-41、JL-3 の MIRV 弾頭数量は少なすぎないか？

ついでに説明すると、地縁戦略に基づいて、中国に対する台湾の占める位置、すなわち海軍戦略上の重要性を見出すことができる。現在の状況では、中国海軍の SSBN が台湾東岸に接近して北上し、北極軌道を経由して米国を戦略核攻撃することは不可能である。しかしいつの日か、中国の SSBN 基地が台湾東岸に建設されれば、この種の北上は相当容易になるであろう。

以上